

たじみん昼話 46

食は文化だ、給食の教育的意義

小中学校時代の昼食は学校給食でしたね。キキョウが通っていた学校の給食メニューは、毎回異なっていた（一ヶ月間は）記憶があります。キキョウが学校に通った理由の一つに、このメニューの変化があります。給食のメニューを体験するために、学校に通っていたと言っても過言ではありません。何せ、ごく平凡なキキョウの家ではお目にかかれないオカズが、毎日出てくるのですから。

家庭には、洋食しか食べないとか肉を食べないとか、様々な食事形態があります。共通するのは、基本的に同じものを繰り返し食べている（1週間・1カ月サイクルで）ことです。つまり家庭の食事は極めて保守的であり、それ故、家庭の特徴を表す文化であると考えられます。

この食事という保守的な子供の認識を変革するのが、幼稚園（保育園）や学校という新しい枠組みの社会で体験する給食です。キキョウが給食にワクワクしたのは、（大げさに言えば）「食の異文化体験による変革を体験できる」からだったと思います。この文化体験はメニューに留まりません。「いただきます」「座って食べましょう」「手を洗う」といった心構え、さらにナイフやフォークの使い方、他の人の食べ方を見ながら学ぶマナーやルールといった、家庭では体験できないことの全てが、新しい文化体験だと言えます。

このように給食は、新しい文化体験を通して、「ルールや考え方など様々なものに関心を持たせる」といった、社会で生きていくために重要な社会性を、私たちに教えてくれているのです。

生徒会が、購買部を復活させるために行動を起こしています。昼のメニューを充実させることも目的の一つのようです。この活動は、お昼の楽しみを増やすと共に、多治見高校の文化を、食から新しく作り出すことにも繋がりそうなのです。生徒会の行動に期待しています。

もちろんその期待には、あの小学校時代の想いを再度味わえることも含んでいます。